シンガポールのアートと美術教育
― 図画工作科の実践を交えて ー

前シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校教諭
宮崎県児湯郡新富町立新田小学校教諭　岩切　武志

キーワード：在外教育施設、シンガポール、アート、美術教育、図画工作科

赴任校の概要（2021 年 5 月 10 日現在）
シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校
The Japanese School Singapore Clementi Campus
URL: https://www.sjs.edu.sg/clementi/
児童数 小学部 822 人

１．はじめに

シンガポールの町並みは造形的な美しさにあふれており、アートに関するイベントも多い。シンガポールのアートや美術教育がどのような変遷をたどって来たのかを明らかにしながら、シンガポールが美術教育をとおしてどのような未来を目指しているのかについて自分の図画工作科の実践を交えつつ考察したい。

２．シンガポールの美術教育の歴史

マレー半島の南端のほぼ赤道直下に浮かぶ島国であり、東京 23 区程の面積しかない都市国家シンガポール。シンガポールは周囲をマレー文化圏に包囲された華人社会中心ではあるが他民族国家であり、天然資源を持たない。このような民族的、地理的条件をもつ国がどのように国家としてまとまっていくかが、国家的課題であった。この課題をどのようにシンガポール国家がアプローチしていったかについて、佐々木宰(2017)※は「多民族社会が国民国家として成立するためには、民族集団とは別に国家に対する帰属意識が必要になる。したがって、シンガポールの国民統合は、地政学的条件としての多元主義と、国民国家の条件としての国民の創出という 2 つの課題達成を目指すものであった。多様化と標準化の両者を止揚する試みの過程であると換言できる」と述べている。

シンガポールでは独立以後、多様化を容認する姿勢と国民としてのアイデンティティーや共通した思想を育む国家施策がとられてきた。日本の学習指導要領にあたるシンガポールの教育シラバスの美術教育の変遷を紐解くと、国家統合のための施策として美術教育もその一翼を担ってきたことを窺うことができる。そればかりではない、シンガポールは、地理的条件や国家統合という足元の課題をアートの力を使って解決するばかりか、アートの力で技術面や文化面で世界の最先端を突き進み、アートの力でシンガポールの未来を描こうとしているように思える。

３．シンガポールのアートの歴史と現状

2018 年 10 月 7 日、ナショナルギャラリーシンガポール（National Gallery Singapore）を訪れ、シンガポールのアートの歴史と現状についての調査を行った。ナショナルギャラリーのガイドにインタビューした調査結果をまとめると以下のようになる。

シンガポールの独立前 1950 年～60 年代はアートのメディアは木版画がメインであった。題材としては、その当時、人々のまわりにある問題への提起、不条理、貧困などを取り上げて、それに対してどう対処して

いくべきかを人々に訴えるものであった。

戦後、独立建国後には、1965 年以降「人々に希望を与える」「気分を高揚させる」作品が多くなり、社会リアリズム作品が主流になった。独立後は、政府が厳しくチェックしていた共産主義的なものはNG とされた側面もある。

1970 年代以降、アーティスト自身が自分の身体を使って表現を始めるパフォーマンスアートが増えてくる。そして、アーティストたちが、より社会と関わるためアートを通して模索する時代へ。そこで、社会への批判や不安、不満なども出てきている。

他の国と同じように、時代に応じてアートの潮流も変化し続けている。

４．現地校ヘンリーパーク小学校における美術教育の実際

2018 年 8 月 23 日、シンガポールの公立小学校であるヘンリーパーク小学校(Henry Park Primary School)を訪問し、美術の授業を参観した。

この日、2 年生児童は肖像画をクレヨンで描いていた。鮮やかな色使いで自分自身の肖像を描くのに夢中になっていた。シンガポールの小学校の美術の授業では、卒業までに 32 名のアーティストを通して学ぶ。各学期に１名のアーティストに焦点化し、そのアーティストが得意とする技法や造形的な特徴から、造形的なものの見方や考え方を学んでいく。そして、アーティストから学んだことを活用して作品をつくることを通して、造形的な資質・能力を高めていく美術教育を行っている。

現在の日本の小学校の美術教育が題材中心的であることに対して、シンガポールがアーティスト中心的であることはおもしろい。鑑賞から始まり、表現へとつながるプロセスを大切にしているのであろうと感じた。

子どもが持っていた美術学習用のスケッチブックを開くと、現在取り組んでいる作品のきっかけになったアーティストの作品とそのアーティストの作品の特徴を記したワークシートが貼り付けてあった。また、別のページには、アーティストから得たインスピレーションと自分の作品をつなぐアイデアスケッチも絵や言葉で記されていた。

美術教師に、本時はどのような指導をしているのかについて質問した。すると「クレヨンの色を混ぜているか。輪郭をはっきりと描いているか。背景は白い所を残さず塗っているか」という 3 点について、重点的に指導しているということだった。アーティストの作品から学んだことを活用できているかどうかが、やはり指導や評価のポイントになるようである。

ヘンリーパーク小学校の美術の授業

５．第 3 学年の図画工作科「ねん土マイタウン」の実践

シンガポールは地盤が安定しており、地震の心配度が非常に低い国であり、著名な建築家がシンガポールで独創的なデザインの建造物を次々に建設している。この独創的なデザインの建造物に刺激されるかのように更に独創的なデザインの建造物が建築され続けている。

このようなシンガポールの独創的な建造物に囲まれて生活している環境を生かした図画工作科の授業はできないかと考え、実践を行った。

⑴　題材名　第３学年「ねん土マイタウン」

⑵　題材の目標

○　自分が住んでみたい街についての想像を広げながら、粘土で立体に表すことができる。

⑶　授業の実際（全２時間、本時は２単位時間を続けて実践）

①　シンガポールの特徴のある建造物の造形的なおもしろさについて話し合う。

導入では、シンガポールで最も有名な建造物の１つであるマリーナベイサンズの写真を黙ったまま黒板に貼った。児童が「マリーナベイサンズだ！」と声を上げる中で、続けてアートサイエンスミュージアム、ピナクル・アット・ダッタートン等のシンガポールで児童が日常に目にしている造形的な特徴のある建造物を数点提示した。

そして、「どの建物がすき？」と問うことで、シンガポールの建造物の造形的なおもしろさに気付くことができるようにした。「アートサイエンスミュージアムは花びらが開いているみたいでおもしろい」「家の近くのザ・インターレースは、積み木みたいでおもしろい」といった意見が児童から出された。

そこで、「日本ではありえない形の建物がシンガポールにはいっぱいあるね。今日は、粘土を使ってぼくだけ、私だけの街をつくろうと思うんだけど、シンガポールにもないようなおもしろい形の建物がある街ってつくれるかな？」と語りかけると「できます！」の連呼が教室に響いた。

そして、「ねん土で、おもしろい形がいっぱいの、ぼくだけの、わたしだけのマイタウンをつくろう」とめあてを設定した。

②　本時を見通す。

かきべらや切り糸といった道具の使い方を実演することで、これらの道具を使うことで、おもしろい形がつくれることを理解することができるようにした。

更に、導入で提示したシンガポールの造形的におもしろい建造物の形をつくるためには、「どの道具を使えばよいか？」と問うことで、道具の使い方と実際に生まれる形を関連付けて考えることができるようにした。

③　マイタウンをつくる。

実際の造形活動が始まると、個人での造形活動中には、「ありえない」「おもしろい」「世界に１つだけ」「ぼくだから、わたしだから」などのキーワードを児童と共有することによって、独創的な造形物をつくるように促した。自分の好きなスポーツや食べ物を建造物にしたり、丸や三角などの形を組み合わせて建造物にしたりする児童の姿が見られた。街のシンボルが思いつかない児童には、モデルで示した建造物の写真をつくらせることで造形的な感覚を刺激し、つくりたいものを発想することができるようにした。

ビルの上に飛行機を重ねた形など、シンガポールの特徴ある建造物をアレンジする児童もいれば、ぐるぐるを組み合わせた形や直方体をねじった形を組み合わせるなど、建造物としてはこれまで見たこともない形を組み合わせて制作する児童もいた。

造形活動の後半では、各自がつくった「街」を班の友だちと合体させて「国」をつくらせた。友だちがつくった造形物に刺激を受けて、新たに造形物をつくる児童もいた。

④　海外旅行に行く。（鑑賞）

授業の終盤では、粘土で自分の分身をつくらせて、その自分の分身を他の国に海外旅行をするという鑑賞活動を行った。

児童は、他の国を自分の分身を歩かせながら「このタワーは、弓矢のように曲がっていておもしろい」「建物にひもが絡みついているところがすごい」と、造形的な特徴のおもしろさに気付いて感嘆の声を上げていた。

⑷　授業を終えて

私が予想していた以上に児童は独創的な形を発想したり、形に表したりすることができていた。身近な造形物を取り上げて題材に活用したことで、造形活動への児童の興味・関心を高めることができた。また、日常的に独創的なデザインに親しんでいる児童は、建造物に対しての造形感覚が高まっていることを実感することができた。しかし、単純に現存する建造物を模して制作を行う児童も少なからずおり、どのように形を変えると「ぼくだけの、私だけの建物になるか？」と声掛けを行う場面も数多くあった。シンガポールのように造形的におもしろい建造物やアートが身近にある環境であろうとなかろうと、様々な造形に触れる経験を児童に積ませることと、造形的な特徴に気付かせるための手立てを授業の中で講じていく必要性を強く感じた。

独創的な建造物を造形する児童

６．おわりに

私がアートの本質であると考えていることの１つに「誰も考えたことのないもの、誰もみたことがないものをつくる」ということがある。シンガポールは、地理的条件や国家統合という足元の課題をアートの力を使って解決するばかりか、アートの力で技術面や文化面で世界の最先端を突き進み、シンガポールの未来を描こうとしているように思える。シンガポールの美術教育は、多民族国家の中で国民のアイデンティティーや未来に向けた明るいモチベーションを保つための重要な基盤として機能し、今後その重要性は益々増していくものと推察する。

AI の進化やグローバル化により、求められる資質や能力が発想や構想等の想像力や表現力へと大きくシフトしてきている現在、日本も国民のアートへの関心を高めたり、美術教育においては、多様な鑑賞の機会を充実させるとともに、独創的な表現を追究する学習を展開したりする必要があると考える。

※佐々木宰(2017)「シンガポール美術教育における国民統合」『美術教育学研究』49 巻 1 号 p. 177-184